

(様式)

常任委員会行政視察報告書

委員会名	子育て文教常任委員会	委員名	中村 みなこ
視察地	兵庫県加古川市		
調査事項	部活動地域展開に向けた取組について		
視察年月日	2025. 11. 12		
視察内容	<p>○調査概要</p> <p>国の定める『改革推進期間（令和5年～7年度）』に先行し、加古川市では令和4年度から継続して試行プランの実施による検証を行い、地域展開に向けた取組を行っている。市長部局のスポーツ・文化課と連携し進めている。学校教育部は学校との調整を、推進課は受け皿等の環境の整備を担っている。</p> <p>本格実施まで様々な試行プランをいくつも実施、各種説明会も実施されている。個人情報連絡アプリも導入し、部活動の概念にとらわれることなく新たな活動の仕組みのスタートに向けて進められている。</p> <p>○調査結果に対する意見</p> <p>試行錯誤であるとの説明だったが9月に3種目で先行的にスタートしている。現状の課題を打破するという強い意気込みを感じた。</p> <p>「部活動の概念をなくす方向性」については、まだまだ検討の余地がある。部活動の教育的意義は、地域展開の中で位置づけられてはいない。部活動を学校教育から切り離し社会教育に移行していくとの説明だったが、今まで部活動で培われてきた、自主性・人間関係・責任感等の育成、そのような機会を保障しないままでいいのか、もっと検討が必要である。学習指導要領との関連については国からももう少し具体的な方針が出されるのかもしれないが、出されなくても放置できない問題だと考える。</p> <p>それに付随して、地域展開された活動での子どもの成長や実態が、子どもたちを取り巻く大人たちによって共有される機会がない。部活動であれば、教員同士、いつでも伝え合えたが、地域展開だとそうはいかなくなる。評価、必要な支援や行った支援など、情報共有しながらその子のよりよい育ちをより多くの大人の手と目で支えていく体制を構築すべきである。縦割りが進むことのない体制づくりが求められる。</p> <p>○本市における実施の可能性</p> <p>加古川市の部活動の状況(生徒数・部活動減、地域格差等)やアンケート結果による児童のニーズ(レクリエーション感覚で体験したい等)は、本市と同様であった。</p> <p>北海道の方針の域を出ず、休日の活動にとどまる。平日も含めて進めていく計画は今のところ見えていない中で、本格実施までのスケジュールが確立し見通せている加古川市の取組は大いに参考になると感じた。</p> <p>一番重要となるのは、受け皿となる団体がどれだけあるのかという点である。本市では、今のところ外部講師としての人材派遣止まりであるため、子どもたちに各種運動・文化等の活動を体験させたいと思ってくれる団体がどれだけ掘り起こせるか、今後の取組に大きく左右さ</p>		

(様式)

れる。要件等をしっかり吟味して提示する段階を経ないと未知数であるが、既に世の中の動向を察知して関わりたいと考えている団体もいると思われる。

また、本市と加古川市では、川の町という共通点がある。レガッタなどの加古川ならではの種目は魅力である。旭川ならではの活動を組み込んで打ち出したいところである。また、既存の施設を生かすと考えると ICT パークを活用した活動もできそうである。市の施設の使用料の軽減は必須である。

○課題等

加古川市でも同様、生徒の移動には課題がある。家庭で対応してもらうように説明しているとのことだが、それではやはり格差はなくなる。中央の方が活動団体も多くなると考えられるため、自転車移動は距離と季節で限界があり、保護者が送迎するか、バスでの移動となる。それでは、現在ある家庭の格差がそのまま持ち込まれると思われる。そんな中ではあるが、加古川市ではファミリーサポートを高校生まで拡大して移動支援を行うなどが検討されている。これは大いに参考となる手法だと思う。

また、教員ではない方たちが携わることへの不安が挙げられていた。指導者の資質・資格等の要件や何かあったときの処分等、厳格にすることはもちろん、しっかりとチェック機能・相談体制を整備しなくてはならない。また、あくまでも子どもたちの教育的な活動であり、運営団体が営利目的に進み、費用負担が重くならないように行政の関与は大事になってくる。

それらの点をふまえ、軌道に乗るまで行政がしっかり関与するとのことであったが、行政の手から離れた時に、様々なルールがルーズになってしまうことも懸念がある。

加古川市で、このように国に先駆けて部活動地域展開の取組をスタートできた背景には、過去の阪神淡路大震災によるコミュニティ重視、近年の部活でのいじめ事件などへの市民の思いなどという、この地域ならではの背景があると思われる。本市において、何が後押しになるのかは今のところ見当たらない。また、北海道が示している方針の範囲内でしか進めようとしないうのでは、本市独自で加速した取組にはならない点は課題である。

※ 「視察内容」欄には、調査結果に対する意見、本市における実施の可能性、課題等を記載すること。

(様式)

常任委員会行政視察報告書

委員会名	子育て文教常任委員会	委員名	中村 みなこ
視察地	東京都武蔵野市		
調査事項	武蔵野市立ひと・まち・情報創造館 武蔵野プレイスについて		
視察年月日	2025. 11. 13		
視察内容	<p>○調査概要</p> <p>2011年に開館し、図書館・市民活動支援・青少年活動支援・生涯学習支援を兼ね備えた複合施設。図書や活動を通して、人と人が出会い、知的な創造や交流を生み出し、地域社会の活性化を深められる公共施設を目指している。こだわった空間づくりによって、あたたかく居心地のよい、そしてそれぞれの目的に沿った空間が実現されており、市内外から多世代の利用があり、長時間滞在できる施設となっている。</p> <p>○調査結果に対する意見</p> <p>多岐にわたる機能が一体となっている施設である。どのフロアも利用したい、ゆったり滞在したい、と感じさせる素敵な空間となっていた。時間をかけて検討し、理念や条例、設計に至るまで、コンセプトを貫いた結果であると考えられる。平日の午前の視察であったが、どのフロアにも多くの利用者が思い思いに過ごし活動していること、来館者の滞在時間が長いことから、当初の理念やねらい(活動支援型の公共施設、それぞれの活動を通して時間を共有する快適な空間、回遊が自然に行われる仕掛け)が実現された施設であることが理解できた。</p> <p>また、青少年の居場所の点を重視してここを視察先として選択した。その点からみると、大人に必要以上に干渉されないうつくりやルールは子どもたちから受け入れられ、その一方で一人ひとりに寄り添おうとする職員の姿勢が、掲示されていたメッセージカードのやりとりからも重視されているのが理解できた。「教育的意図を全面に出さない」「多様なニーズを受け入れられる環境づくり」に徹し、青少年が安心して、そして居心地よく自由に過ごせる居場所にするための工夫が随所に見られ、それが子どもたちにも受け入れられ、居場所として定着していることは素晴らしいと思った。さらに、市民に愛着をもってもらう工夫も必要だと感じた。施設のキャラクターやマーク、オリジナルグッズもの作成・販売も魅力的である。</p> <p>○本市における実施の可能性</p> <p>青少年の居場所という観点からみると、新庁舎となってから、多くの高校生が庁舎内で平日・休日とも学習しており、居場所としてのニーズはまだまだあると考えられる。本市の北彩都子ども活動センター「あそびーば」は武蔵野プレイス地下2階の機能に近いが、規模が小さく、ニーズに応えきれていない現状がある。各地区に点在して作ることを目指したいが、他の機能とのつながりを作るのは難しくなる。</p> <p>武蔵野プレイスは、図書館機能をメインとして、様々な機能と連なっていることを考えると、本市の中央図書館に他の役割をプラスした公共施設の建築は、今のところ考えにくい。一つの建物ではなく隣接させて回遊できるようにするなら可能性はあると考える。</p>		

(様式)

○課題等

武蔵野プレイスでは、開館して15年を迎え、設備のメンテナンスが必要とされている。それも、年間80万人の利用想定に対し、160万人以上の来館者となっているため、施設の管理の面で不具合に対する対策が直面する課題となっている。

本市でこのような複合施設を考えた時に、一番は立地条件が課題となる。武蔵野プレイスのように、駅に隣接、大学が5校あり、中高生の通学の中継地点でもあるなど、多くの方の利用が見込めるような場所がなかなか見つからない。施設ができることで、人が集まることを期待しての場所を考える必要がある。

※ 「視察内容」欄には、調査結果に対する意見、本市における実施の可能性、課題等を記載すること。

(様式)

常任委員会行政視察報告書

委員会名	子育て文教常任委員会	委員名	中村 みなこ
視察地	神奈川県大和市		
調査事項	大和市文化創造拠点シリウスについて		
視察年月日	2025. 11. 14		
視察内容	<p>○調査概要</p> <p>大和駅の東側にある「大和市文化創造拠点 SiRiUS」はまちのランドマークとなって9年。芸術文化ホール、屋内子ども広場、図書館、生涯学習センターが一体となった同施設は、市民生活を豊かにする文化拠点を目指してつくられた。指定管理者のやまとみらいは、6つの企業が共同で、民間主導で運営されており、それぞれの専門分野がそれぞれの機能を担当している。ホールは稼働率96%、サブホールは98%。12月は100%になる。図書閲覧席が1000席では不足となるなど、市内外から多くの利用がある施設となっている。</p> <p>○調査結果に対する意見</p> <p>大学で自分の町の誇りとなるものは、と尋ねられ、大和市出身の学生が「シリウス」と答えたことと紹介があった。また、この視察で説明いただいた指定管理統括責任者は「シリウスはすごいでしょ」と自慢気におっしゃっていたのが印象的だった。地域住民にとって、誇りとなる、満足度の高い施設が実現していることが素晴らしい。目的がなくても立ち寄りやすい施設、子育て支援、高齢者支援になるような取組や仕組みも考えられている。</p> <p>○本市における実施の可能性</p> <p>武蔵野プレイスと同様、立地は大事なポイントである。駅近郊で交通の利便性、商業施設があり、周遊性の考慮された場所となる場所は、本市では確保できそうにない。現在、文化ホールの建設候補地が旧庁舎跡地であるが、そのホールとの複合施設としては難しい。</p> <p>シリウスは図書を中心として各階の機能が考えられている。本市では、今のところ図書館機能は文化ホールに組み込まれる可能性は低いため、図書館建替えの際には参考にできる要素がある。特に多世代が滞在できる、「居場所」は本市にも必要である。子どもたちや若者の居場所は、私自身意識している課題ではあるが、高齢者の居場所一人ぼっちにしない、ひきこもらせない、という視点はぜひ取り入れるべきであり、様々なところで実現できると考える。</p> <p>また、子育て支援として一時預かりを格安で実施。本施設を利用しなくても、預けることができ、高いニーズがある。こどもコーナーも含め、そこでの育児相談や支援につなげる機会にもなっている。こども誰でも通園制度との兼ね合いもあるが、文化イベントにおける一時預かりの体制整備は参考になると思った。</p> <p>ホール側は見学できなかったが、催しの内容によって男女比を考慮し可動式のトイレの壁を調整できるとのこと。現在のトイレ問題に合致する対策であり、参考にしたいと思った。</p>		

(様式)

○課題等

本市の人口は大和市に比べて多いが、広い土地に散らばっており、バスの利便性がますます悪くなる中で、どこに、どんな施設を作れば多くの方に利用していただけるのか、大変大きな問題である。

大和市としては人件費を筆頭にかさばる財政については大きな課題である。民間運営としていてもほとんど利益を追求していないというのは、なかなかできないことだと思うが、あるべき姿勢だとも感じた。民間運営の利益追求を最低限に抑えられるかについては課題と考える。

また、全ての図書が IC タグで管理されており返本から各階への配架まで、機械化されている。利便性は高いが、かなりの高額なシステムとのことで、最新設備・機能の導入の費用面では大きな課題となる。

文化関連の事業は費用対効果が数字として表すことができないため、文化分野ではなかなか予算が付きにくい。まちづくりの観点での文化の位置づけが大きく問われる。

※ 「視察内容」欄には、調査結果に対する意見、本市における実施の可能性、課題等を記載すること。